書評

1985.6.15
第74号

書評編集委員会

書評 74号（6月号）目　次

書　評	ナチス時代の「ジプシー」 ドナルド・ケンリック／グラタン・バックソン著　小川　悟 訳	植松　健郎	4
	賤民文化と天皇制 菅　孝行 著	出雲路敬作	10
連　載	聞き書き・部落に生きる人たち⑦ 差別の仕組みが見えてきた	田宮　武	16
	研究余滴・ボードレール13 ボードレールと死 その2	山村　嘉己	41
	日本中国ことばの来往 その20	芝田　稔	50
	羅　針　盤		1
	お知らせ／お詫びと訂正		56
	編集後記		57

'85.6 羅針盤

「戦争も、全共闘運動も体験しなかった人たちにハクのようなものをつけるために」と前置きしながら始まる、『無共闘時代』（週刊本、朝日出版社　泉麻人著）という本がある。

〝無共闘〟とは、つまり「戦争」や「全共闘運動」のような〝事件〟に直接の当事者となる社会的体験を世代として持ち合わせていない「全共闘」にすら生まれ遅れ、共に闘かったことの経験がない、というような意味合いであるらしい。著者は、昭和31年、'56年生れの29歳。

彼（彼ら）は、10代の初めに〝連合赤軍事件〟や〝東大の陥落〟を茶の間のテレビで、ゴジラ映画と同じ感覚で観た過去をもつ。

「全学連とか安保とか、デタントとか、冷たい戦争とかそういう状態というのは、わりと読んだりするのが嫌いじゃないし、面白いとは思うけれども、いざ自分の実体験というところが、すごい無茶苦茶離れ過ぎているんじゃないのかな、離れ過ぎているから、簡単にパロディに出来ちゃうみたいな、すごい軽い気持ちでね」（同書二〇八頁）。

「すべてに、ライフスタイルに影響を与える事件という

か、思想や考え方にまで影響を与える事件というのはなかった」（同書一九三頁）。

さてこの著者は'56年生れ、物心がついた4～5歳の頃つまり'60年代初頭から、現在に至るまで本当に「事件」は何もなかったのだろうか。

「事件」は何もなかった理由ではない。'60年には安保条約の改定、'65年には日韓条約締結、'70年安保、沖縄本土「復帰」、時期を前後しての全共闘運動、いわゆる学園紛争の高揚が、そして'73年にはオイルショック、'75年ベトナム戦争終結、'79年イラン革命、中越戦争、ソ連のアフガン侵攻が、'80年5月には韓国光州事件がおこっている。

本来ならば、「ライフスタイルや思想、考え方に影響を与える「事件」は、彼らの時代にも世界のどこかで起こっていたし、現在も尚おこっているのだ。問題は彼らがそれを自分の「事件」としなかった（できなかった）ことではないのだろうか。

本書のなかで同世代の「事件」として扱われるのは鉄人28号からウルトラマン、脱脂粉乳から牛乳、ベルボトムのジーンズからオンワードのスラックス、という日常生活のなかのこまごまとした価値感の移りかわりだけであり、そこに同時代に生きた、同世代同志の共通項を見つけ出そうとしているのである。

いわばこれは、自分たちの手で「事件」をつくれなかったことへのささやかな自己弁護であり、本音なのではないか？

しかも同時に彼らの言うこの「無共闘世代」よりも、もう少し遅れて生まれ、おなじく同時代に起生する「事件」を自分の問題として未だとらえられずにいる私たちの日常生活を支える「本音」でもある。

「痛いのが嫌だったり、苦しいのが嫌だったり、それは結局暗いことが嫌だったり、そういう意味では反戦なん

ですよね、反核でもあり」（同書二〇九頁）。

というレベルでしか現実をとらえられない。現実には世界の46ヵ所が戦争中であり、七〇〇〇万人の人間が武器をもって戦地におもむいている。今年の1月中旬から2月にかけては、アメリカ軍と韓国軍の合同軍事演習チームスピリット'85が、20万人の兵士を動員して行なわれ時期を同じくして自衛隊とアメリカ軍の合同演習が北海道、沖縄で行なわれているにもかかわらず〝暗いのはいや〟だから〝反戦〟では、日常感覚と現実の落差が大きすぎるのではないか。

もちろん、危機感をもてといわれてもてるものではないし、強制することなど許されない。

危機意識をもっているから、〝エライ〟わけでもない。私たちをとりまく日常生活が、全世界のほんの一部でしかないように。危機意識をもつことそのものもやはり全世界のほんのひとにぎりの出来事しか獲得できていない。

重要なのは、「落差」そのものを埋め合わせることであり、日常生活を営むことと、全世界を獲得することと決して対立しない、むしろ同じ意味を共有し得るような関係をつくることだろう。

全共闘も無かった彼らより尚一層なにもない時代を、そろそろ、これまでにない価値感をもってのりこえなければならないだろう。

―書　評―

ナチス時代の「ジプシー」

（ドナルド・ケンリック　グラタン・バックソン　著　小川　悟　訳）

植松健郎

サラサーテの「ツィゴイネルワイゼン」（ジプシー風）の啜り泣くが如き切なく甘いメロディ、そして激しいリズム、それは歌劇カルメンを思い起こさせ、エキゾチックな服装の女占師の姿を、激しいリズムに合わせて踊る男女の姿を次々と想像させる。「ジプシー」という言葉がわれわれに抱かせるイメージはどことなくロマンチックな世界であるようだ。このメロディは、ヨーロッパ各地を漂泊しながら自由な、しかしもの悲しい生活を送る「ジプシー」をあらわしていたのであろう。

「ジプシー」は、われわれには遠い存在であり、真実の姿を知る機会は少ない。知らないが故にロマンチックな光景を重ねあわせるのであるが、それでいて「ジプシーのような」という表現が何処か否定的な意味で使われていることを知っている。

数年前、ルーブル博物館近くを歩いていると数人の女の子供たちが、手に広告紙のようなものを持って近づいて来た。もの乞いだと直感して避けようとする暇もなく一斉にまるで獲物にとびかかる野獣のように前後左右から群がり、ポケットに手をつっこむやら、服の襟をひっぱるやら、鞄をひったくろうとするやら、しかもこれがあっという間の一瞬間の出来事で、まるで手品師のように手さげ鞄のチャックがあけられ、パスポートがなくな

っていた。かろうじて最年長者、十三、四才の女の子をつかまえ、とったものを返せというと、何も持っていないことを上衣をめくって見せようとした。すぐに人垣ができ、すぐ近くの店員が警察に電話をした。その間に、いつのまに誰が投げ捨てたか、パスポートが落ちていた。被害はなかった。離してやろうとすると、人垣の人々が許さない。「ジプシーの子だ」といって、「彼らはいつもこの界隅でかっぱらいをしている悪い子だ、警察に突き出すべきだ」というのである。やがて警察車が来て警察署まで同行させられることになった。調書がとられた。通訳に入ったドイツ語を話すフランス人も、「ジプシーの子の仕業だ」といった。この日はこれで半日が費され、博物館へ行けなくなり、翌日再度ルーブルへ行くと、何んと同一グループが全く同じスタイルで旅行者をねらっていた。年齢が低く、すぐに釈放されることになっているのだ。地下鉄に乗ると、車内でも、連絡路でも、この世でこれ以上悲しく哀れな表情はないという表情と声音で物乞をする「ジプシー」の女たちによく出会う。「ジプシー」だといわれているからそう信じているにすぎないが、いわゆる「ジプシー」の顔が一見してわれわれに明確に区別できるわけでない。

いま、ヨーロッパ諸国はどこも大きな失業者問題をかかえている。因みに西ドイツの失業者は二百三十万である。外国人労働者は四百五十万。その半数はトルコ人である。ギリシャ、イタリアはいうに及ばず、東欧圏からも多くの外国人労働者が来ている。失業者たちは「自分たちの職を奪ったのは外国人だ。外国人は国へ帰れ」という。所々で「外国人は帰れ」の落書が見られる。外国人労働者の多くは、ドイツ人の就労したがらない職業についているにも拘わらずである。「ジプシー」は、凡そ一千年前インドを出た集団である。彼らは東欧から西欧にかけて広く分布している。長い歴史の過程で民族間の混血があったのはいうまでもない。このように多民族が混血し、混住するヨーロッパで、その容姿から民族を明確に区別することは実際には不可能である。

「ジプシーは労働を好まず、盗みをし、ひとを欺く」という偏見が一般にある。それが「働かず、盗みをし、ひとを欺くのはジプシーだ」ということになる。真実を知らぬまま、ひとの言葉を信じることは、まさしく差別の再生産になる可能性が大いにある。

ナチス時代のユダヤ人迫害を知らぬ人はいない。六百万のユダヤ人がドイツ及びドイツ占領地で抹殺された。ユダヤ人は法によって公務員の職を剝奪され、学校から締出され財産を奪われ、ユダヤ人証明書の常時携帯を義

務づけられた。次々と出るユダヤ人差別・迫害の法は「ユダヤ人は抜け目がない。悪知慧にたけている。金の亡者だ。ひとを欺く」という差別意識を普遍化させた。しかしユダヤ人は金銭欲が強く、人を欺くといわれても、二千年来迫害され、追われて幾度も財産を強奪され、まともな職業につくことも、家や土地を所有することも禁じられて来た彼らにどのような道が残されていたであろうか。彼らが頼れるものは金しかなかった。あるいはすぐれた頭脳を生かし学問の世界に生きるしかなかった。

われわれは「ジプシー」については殆ど無知に等しい。いままでにも日本に「ジプシー」について紹介された文献がないではないが、被差別少数民族、被抑圧民族として紹介されたのは今回が初めてである。一九七二年に出版されたD・ケンリック、G・パックソン共著の『ナチス時代の「ジプシー」』が、本学教員小川悟氏らの手で訳出された意義はまことに大きい。

「ジプシー」という言葉はすでに差別なのである。言語的にも、エジプト人という言葉に否定的な意味を与えたものである。エジプトから追放されて来た(と主張した)ロマの集団につけられた呼称であった。一方でまた、「犯罪に対して罪の意識なく、労働を好まず、盗み、欺くもの」と「ジプシー」像とを重ねる差別意識が醸成されていった。われわれは、その歴史から、彼らをロマ、あるいはシンティと呼ばねばならない。九世紀頃にインドから来た民族だということはすでに学問的に証明されていたが、故インデラ・ガンジーは、政治的現実として、この「逆児」を認知した。インドを出、漂泊をつづけ西欧に入った黒い肌のロマ集団は追いたてられ白い肌のシンティは許容された。小集団、大集団を構成して中世時代に彼らがはじめて西欧に流浪して来た際、彼らは異様な民族として迎えられた。彼らの黒い肌は、西洋キリスト教思想から劣等と悪質を特色づけるものと見做された。この偏見が被差別の運命を彼らに背負わせてしまった。ロマは劣悪なる特性をもつ人種とされ、漂泊しながら詐欺、窃盗、そして魔術によって民衆をまどわすものとして、法によって彼らを追放する政策がとられた。この徹底的ロマ追放政策が、各国で、幾世紀にわたって行われて来たのであり、ロマであるということだけで「ジプシー」として罪禍の烙印となった。

ユダヤ人迫害の歴史はひろく知られているが、ロマの迫害は知られていない。ナチス時代、二十五万のロマ、シンティが抹殺されたことは知られていない。アウシュヴィッツ、ブーヘンヴァルトなど抹殺工場としての強制収容所に人体実験用に送られたのである。その中には、

ドイツ軍将校として服務していたもの、戦場で負傷したものも含まれていた。先祖にロマか、シンティがいたという理由だけで。

ナチスは、ユダヤ人やロマ、シンティの労働力を強制的に搾り取る一方で、生物学的に抹殺していったのである。

第三帝国は崩壊した。強制収容所は解放された。しかし、彼らの行く先はなかった。精神的にも肉体的にも徹底的に虐待されてきた彼らに自力で生きる力はなかった。彼らの難民としての生活が始まった。しかし、彼らは難民収容所の管理体制とも衝突する。たとえば、アウシュヴィッツ生きのこりのロマは、家族についての詳しい申告を拒否した。それは、その情報によって身内のものが逮捕されないという保障がなかったからである。

ナチス体制から解放されながら、そして新たな社会構造になってもなお、彼らの解放は期待できなかった。強制収容所からの解放はあっても、偏見と差別は温存されたのである。賠償請求権問題に関する協定の中に、「人種ゆえに迫害をうけたるものは賠償をもって償われる」の条項があるが、これはユダヤ人犠牲者のうち、ナチス支配期以前にドイツ国籍をもったものに関わる条項であり ロマの賠償請求に対しては、「ナチス支配期のジプシーは人種的理由から迫害をうけたのではなく、過去に反社会的、犯罪的行為をはたらいたからである」とされ、請求権は認められなかった。ナチスの迫害が人種的理由であったものを、戦後はそれが治安政策上の措置だと解釈されたのである。即ち、ドイツ国内、あるいは占領地において逮捕されたロマは、治安上の理由からであったと見做された。このようにしてロマは賠償請求権から締め出されてしまった。ナチスドイツ軍から、ロマは盗賊かパルチザンの一味と見做されていたのである。

戦後、西ドイツに多くのロマ、シンティが行方不明になったものとの再会の期待と、就労の期待をもって流入して来た。一九七八年にはその数、シンティ五万、外国

生まれのロマ三万に達していた。しかし彼らが東欧から来ようと東独から亡命して来ようと彼らは招かれざる客であり、逮捕や罰金が彼らを待ちうけていた。かりに赤十字社の調停で入国が認可されても、漂泊を規制する法により、一定半径内での移動しか認められなかった。

西ドイツのみならずスペイン、フランス、イタリー、オーストリア、イギリス等、西欧諸国において戦後のロマ、シンティに対する措置は共通して差別、排斥の思想に基くものである。市の辺境に住むロマは「生国」に戻るよう命ぜられ、外国籍のあるものは強制送還、彼らの集落、バラック等は強制取壊わし、至るところに「ジプシーお断り」の看板が立つ。また彼らの箱車に許可される場所は、大抵水道施設もない不衛生な辺鄙な場所である。

またロマには特別証明書、いわゆる通行証の常時携帯が義務づけられている。あるロマは三百メートル離れたところにトラックを止めてきて、そこに通行証をおいて来たため逮捕され、罰金刑に処せられた。ロマ所有の乗物にはすべて青と白の特別ナンバープレートをつけることになっており、一目で識別できるようになっている。この事件は、銭湯へ行く際に外国人登録証明書を常時携帯していなかった理由で逮捕された本学の在日外国人学生の事件を思わせるものである。

東欧社会主義国では、ロマの定住化と同化を実現する措置がとられたが、これは多数派社会の価値観と規範に無理矢理順応させようとする試みであり、当然問題が生じた。

ナチスドイツの迫害から解放されながら、偏見と差別からは解放されず、社会の辺境に押しやられ、賠償請求からは締め出され、むしろ警察の浮浪者取締の対象にされてきたロマが、市民権獲得、民族としての地位獲得のための行動を続けている。すでに一九七一年ロンドンで第一回世界ロマ会議が開催され、一九七四年には第一回ロマ・フェスティバルも開催された。ロマがかつて鍛冶屋、馬商人、楽士として、社会の構成要員として社会的地位を占めていた時代があった。しかし社会構造の著しく変容した今日、彼らは伝統的生業を営むことができない状況にある。すでに九五パーセントが定住化してしまったロマが、自らのアイデンティティを見出し、ロマ民族の伝統と文化を如何にして維持していくか、その課題は大きい。ロマ語を授業に使用する特別講座がスエーデンにある。東欧ではロマ語の雑誌も刊行された。国連ではインド大使が少数民族ロマをかかえる国々に法的権理を無制限に認めるよう訴えた。問題は多数派社会が、少数派社会の基本的人権と尊厳を、充分な理解と保障をも

って守ることである。

人権意識の絶えざる高揚が求められる今日、あまりにも知られざる被抑圧民族ロマの世界が本書によって紹介された意義はまことに大きい。

（うえまつ　けんろう・文学部教員）

―書　評―

賤民文化と天皇制（菅　孝行　著　明石書房）

―天皇制をやたら「聖化」、反差別理論の現代理論的粉飾も実は差別意識の理屈化―

出雲路　敬作

（一）

神津陽が『ブンカの傾向と対策――吉本隆明から浅田彰まで』（知人館）を書いている。一九八四年までの思想状況を、例えば次のような構で書いている。

ここ一〇年ほどの翻訳文化の仕掛人の一人であった三浦雅士は、五月革命とポスト構造主義の対応とスライドさせて、全共闘運動は一〇年遅れて浅田彰によって総括されたと述べているがとんでもない迷妄だ。

私は『現代思想』のよい読者ではないが、洪水のように垂れ流され、手を変え品を変えて紹介されるヨーロッパの新思想が、一五年前に日本で私たちが体験し受感し、それ以降ずーと考え続けている課題の後をしか歩んでいないことは、立読みでも断言できる。

この口吻は、全くかつての吉本隆明を髣髴させるが、実は、この歩みは、吉本隆明との〈差異〉の刻む過程でもあったようなのである。ところが神津の関係の〈かくめい〉も吉本を本家どりしているし、吉本の〈庶民〉に対する批判は、かなり吉本風であるのだ。それよりも神津が「吉本隆明の個、対、共同性区分は、関係論的にみればアジア的共同性から、家の共同性を対幻想として

杓済し、覚醒せる西欧的な個と結びつけたものだ」とする時、奇妙に、かつての『現状分析』グループと似てくるのはどうしたわけだ。

それはともかく、この神津が、

身体の水平的併在という論理レベルを、権利や意識主体へスライドさせると安易なヒューマニズムになるし、権威や階級対立に着目しても共同性に主体は上げ底されて、別種の不等価が生まれる。

と書いているのは、菅孝行の身体論を念頭にしてでのことであろう。というのは、菅孝行の『賤民文化と天皇』においては、「結局、ブルジョワ社会のヒューマニズムや『社会主義』革命の上すべりのイデオロギー（スターリン的な、といってもよいが、罠にはまっているのはスターリンだけでは決してない）による、通りいっぺんの反差別論（融和主義と階級還元）にからめとられてしまうにちがいない。」という意味のことばが絶えず繰り返されているのである。つまり菅孝行は絶えず、神津のいう安易なヒューマニズムを気にしているのである。神津にすれば、菅は、自分の論理の帰結を絶えず気にしているのである。そこで、菅が導入したのは聖と賤という枠組みである。

天皇が、ハフリの民に祝福されることによって、宗教的権威づけられるということは、ハフリの民の祝福なしには、天皇の権威とは全く空洞にすぎないということを意味する。つまり、ハフリの民なくして古代天皇制無し、賤民なくして古代天皇制無し、という構造がつくられたのである。敷衍すれば、ハフリの民の祝福によって、天皇が天皇たり得ることによって、天皇に服属する豪族もまた、天皇制の秩序の中に自らの位置の根拠（アイデンティティ）を見出すことができ、公民＝良民もまた良民＝公民として、アイデンティファイされるのであったけだし、古代賤民の存在は、天

皇制のアイデンティティを支える基盤にほかならなかった。（九頁）

歴史的に部落差別の根拠となってきたものを解き明かし除去するためには、部落差別の起源をたどってみる、という手続を欠かすことができない。なぜなら、現代の部落差別の民衆的根拠となっている社会意識が形成されたねもとをたずねてゆくと、結局、古代賤民の成立期にその原型を見出さざるをえないからである。（二頁）

そこに見出される差別意識の祖型は、古代天皇制と本質的に不可分のものである。（二頁）

この区分の意識（共同体に所属する人と他の共同体に所属する人とのそれと類似の的部のもの）は、決してそれ自体差別の意識ではない。むしろ、他者として意識された存在は、蔑視の対象であるというよりは、畏敬、畏怖、憧景の対象でさえあった。他者は、いわば、自分たちとはちがうむこう側の世界、日常＝ケの世界に対する、祝祭＝ハレの世界に属する存在であった。それゆえ、他者として区分された異世界の存在は

かりに一面で差別の対象であったとしても、同時に他面では、光輝にみちた、エロティックな、ゆかしい世界でもあるのだ。（三頁）

ここで菅の述べる古代の区分と差別とは、現代の菅が勝手につくりあげた区分とか差別とか憧景とか蔑視であるにすぎない。これらの畏怖とか蔑視は何の根拠もない。古代の人々が「良」と「賤」に何の意味も感じないのは、およそ、中・高の歴史の教科書に掲載している奈良時代の戸籍の写真をみれば一目瞭然である。しかし、問題はこのような基礎知識ではない。問題は、菅の所論は、現

在の、あるいは現在までの差別意識を、そのまま、理屈づけていることである。これは、理屈づけているのにすぎないのではない。理屈づけることで差別意識の増長化となっている。異なる者に対する畏れが差別の理由だというのだ。差別されているものは、どう外的な存在たのか。根拠がないのに、全く幻想である根拠、無根拠の根拠をふりまくことが、どれ程差別に手を貸すことになると思うのか。

(二)

菅によれば、古代賤民の存在が天皇制のアイデンティティを支える基盤にほかならなかったという。要するに菅(たち)によれば、聖としての天皇(文化)は、その実は賤民・被差別民(文化)だというのである。賤民は天皇――つまり〔聖〕――と一緒だというのが、菅の解放理論である。それが「賤民文化の精神世界――天皇制文化転倒の契機を求めて」である。庭園を賤民文化だとするもまた、天皇文化の内実が実は賤民の創造であるということの論証できていないということはこの際、検証しないとしても、どうして、〔賤〕は〔聖〕であるといいたがるのか。賤なることが虚妄ではなく、どうして聖なのか。〔聖〕でないと解放にならないのか。この意識が、部落解放のどれ程桎梏になってきていたかということに思いが至らないのか。このことは、菅が「エタである事を誇り得る」根拠を求めることを、被差別大衆が担って来た栄光の側面、その、創造的な民衆文化の担い手としての、支配者や「良民」に対する優越の側面をとらえることが必要であるというのである。被差別大衆が担って来た創造的な民衆文化とは何であるのか。雑芸能や庭園か、それを根拠に、今度は「優越」を語り、その優越を語ることが解放になるというのか。文化の枠を拡げるのであれば、政治は文化とどういう関係になるのか。根拠のはっきりしない「優越」などは、解放とは全く裏腹である。むしろ

差別の再生産構造の保証である。菅らの文化理論によると、被差別大衆は、必然的に差別されるということになる。差別されることは優越だからそうである。それは、天皇と聖をわけもっていたからだそうである。差別の必然化理論を言葉で否定する菅は、差別を人間社会の本質的な本来的なものとして遡及し、被差別が実は「優越」のあらわれなのだという屈折した心情にのっかって、差別意識のバランスをとっているのである。優越しているからおそれられ、差別されるのだと必然化しているのである。被差別部落は、菅もジグザグの知識の中で認めているように、そう古いものではない。永遠にさかのぼるかのように意識するのは支配者イデオロギーであり、そのイデオロギーにとりこまれて、オカルト風に賤民文化史観をとなえているのが菅らである。被差別部落の人のエタ身分へおとされたのは、その人たちの対権力闘争の結果である。その闘争の結果であるということこそが誇り得る理由なのである。その闘争と闘争の敗北に近世幕藩体制とアジア的社会の問題、被差別部落の問題があるのである。

(三)

菅は、天皇と「差別」とか、農業民と非農業民の枠組みを網野善彦などからずい分適当に仕込んでいる。そうすれば、当然次の箇所も覚えておくべきであった。すなわち、「『靖国』の仕事に誇りすらもちつつ、人間としてとうぜんあるべき情を説、鎌倉中期のこの非人のことばに、私は『差別』の暗い影を見いだすことはできない。たしかに『非人』という用語が使われはじめているところに、『差別』の徴候はあらわれているとはいえ、それは非人自身の心を曇らせるところまでいってはいないのである。」(小学館『日本の歴史』10)。この自身の心を曇らせるところまで至るのが深刻な差別問題である。

菅らの言うように賤民が実際にそれ程優越した存在であり、賤民文化史観が確立したなら、賤民という存在もそう悪くはないということになるではないか。そういう意味では確かに問題はなくなる。しかしそれは菅らが観念をこねている限りにおいてでのことであり、現実の差別に接近したことにはならない。

(四)

困ったことに菅らによると、賤民が天皇制のアイデンティティを提供しているということであり、天皇制のアイデンティティだから誇り得るとまで言っているようである。だから、現在の差別に対する切実さとは全く対応

しないで、実は、差別されることに誇りをもちなさいとでもいうかの如きである。つまり、そこで、菅らが、先づ、天皇制を〈聖〉の問題としてしか扱えないということの問題がある。それに対する〈賤〉は、しばしば〈聖〉と結合しうるがゆえに、〈良〉にも優越しうる〈聖賤〉である。差別を裏返した意識である。知識人のにわか勉強で、天皇制を〈聖〉にまつりあげ、ますます聖化し、不可侵化している菅の理屈こそ、現代の天皇制イデオロギーに侵されているとしか言えない。アジア的社会の問題は、原始の次の段階でも原始の問題でもなく、現代の問題と、歴史的には、とくに幕藩体制と近代の問題としてとらえる時、有効になるものであって、沖浦和光などの言うようにインド社会がかつて、どれ程の生産力を示していようとも、アジア的生産様式、東洋的専制の問題を虚偽にしてしまうことはできないのである。

（いづも　けいさく・大学院生）

——連　載——

聞き書き—部落に生きる人たち⑦

差別の仕組みが見えてきた

話し手　中谷　常吉さん
1914(大正3)年4月22日生
砂原　エリ子さん
1926(大正15)年10月20日生
婦人部員　5名
聞き手　田宮　武

部落問題の学習を始めた

——この地区では、部落解放同盟の支部が結成される前から、婦人が部落問題についての学習会をやっておられたとか、その学習会に八鹿高校の先生が顔を出していたとか聞いているんですけど、もっと詳しくお話を聞かせていただけるとよいと思いましてね。まず、婦人部はいつごろできたんですか。

中谷　婦人部というのは解放同盟に参加してからできたわけです。解放同盟に参加したのが、昭和四十八年でしたかな。

砂原　解放同盟の南但地協を結成したのが、四十八年の七月十五日だったかな、七月でしたね。それで、南但の婦人部結成は十二月の十六日でしたね。その時に、婦人会から婦人部へと名称が変わったわけやね。

——その時にこの部落でもメンバーはいっしょかも知らんけど、婦人会が婦人部へ移行したわけですか。

砂原　そのメンバーが二、三人離れたわけですがな。「その行き方には反対」というわけでね。だから婦人会にその人らはおいでるけど、婦人部に入らなかったわけです。婦人会と婦人部が二つできたわけです。

——婦人部の結成にいたるまでの婦人会というのは、ど

んな活動をしていたんでしょうか。

砂原　婦人会っていうのは、ご存知でしょう。兵庫県連合婦人会といいまして、各地域に全部、どこでもあるんですわね。その末端の組織が婦人会ですけどね。四十四年に同対法（同和対策事業特別措置法）が出たことも、解放運動も私ら全然知らなかったわけです。兵庫県の教育委員会の出先機関である、豊岡市の教育事務所に勤めておられた前田昭一先生という人からね、そういうことを担当しておられたんでしょうか、結局、同和学習を勧められたわけではないんですけども、「やっぱり一生懸命取り組むためには学習せなあかん」と聞いたんですがあ。それで、やりましょうかと、そこから始まったんです。

――それ以前の婦人会としては、どんな活動をしていたんですか。

砂原　それぞれの地区に地域婦人会があって、社会学習をやっとったわけです。まあ、社会奉仕団体みたいなもんで、青少年の育成のこととか、予防消防だとか、消費者運動をしたりしてね。主婦として、地域の婦人として、おかあさんとして、いろんなそういう女の立場で勉強していって、横のつながりを持って社会奉仕をしていくというような、まあ、ありきたりの団体なんです。その中で、大きな行政問題は区長さんを中心にして一生懸命にやっているので、男の人にできない部分を結局婦人会が担っているわけですね。子どもを育てていくおかあさんの集まりが婦人会ですから、同和学習に取り組んでいかないかんと、そういうことになったと。

――さっきでた前田昭一先生のことですけど、関宮町のある部落に行った時に、昭和二十六年ごろに前田先生ほか何人かの先生が部落に入って来て、いろいろと元気づけてくれたという話を聞いたんですけど、その先生がここへも入ってきてくれたわけですか。

砂原　その先生は関宮町の出身なんです。前田先生は南但の同和学習の方に力を入れられた先生でした。

――前田先生がこられたのはいつ頃でしたか。

砂原　入ってきはったって、勝手に入ってきはったんではないんです、お呼びしたんです。婦人会で「先生、いっぺん来て下さい」ということで、お願いしたんです。

――いつごろ？

砂原　四十五年の一月でした。

――前田先生を呼んで、同和学習をしてみようということになった理由はなんでしたのか。

砂原　あの時に、私も婦人会の役員の一人に入っていたんですけど、前田先生を呼んで学習しようとした理由は、

支部長さんも知っとられますけど、南但民主化協議会というのがありましょうがあ。山本(佐造)会長さんのね。現在の南民協は部落抜きですけど、当時は行政と部落の人たちも加わっていたんですね。毎年、南但民主化協議会から、今になってあの顔ぶれを思い起こしてみるとそうだったと思いますけど、山本会長とか、島田一哉さんとか、この部落に入って来ておられましたね。その中に、たまたま私が憶えているところでは、前田先生が加わっておられましたわ。三、四人の、そういった指導者がこの村に入って来られて、婦人会対象ということではなく地区全体を対象にして話に来られた。私らはそこへ集まって、前田先生とか、山本会長さんとか島田一哉さんとかのお話を聞いたわけです。その中で、前田先生の話されることが、どういうわけか胸打ったわけですねえ。それは、学校で同和教育をしている、あるいはしていないことの差、違いというのをひとつ例にとって話されました。

それは、和田山の中学校の話だったと、記憶しとるんですけどね。地区(部落)出身の生徒が一人、地区外二人の三人がある大きな会社の就職試験を受けたんですってえ。ところが、身元調査で一番よくできて、一番良いと思われる部落出身の子どもが落とされてね。そして、二人の地区外の子どもが合格したと。そしたら「なんでぼくらの友だちのこの子が受からんと、ぼくらが受かったんだ」という不信感をいだいて、先方の会社へ交渉したというんです。そしたら「実はあそこは同和地区だということで、落とした」「それだったら、ぼくら学校で同和学習を受けとるんで、そんな汚い会社だったらこちらからお返しします」と、就職せなんだという。それが私に一番印象に残っとるんですけどね。だから同和教育はこれから生きてゆく子どもたちに大事なもんだということを前田先生が話されました。

そして、職業別の、二十八種類か四十八種類だったか、身分差別の封建制の中で、いろいろな職業差別を受けて

ね、その中にも入れんような部落のもんは道具のようにされてきた。あの人は地区(部落)の人ではないんですけど「私たち…」という言葉で言われました。「私たちはこういう風にされてきたんですよ。だから、今一生懸命立ち上がる勉強をして、そして胸はって、生まれてきてよかったというような子どもを作り、自分もそういう風になって生きていく人間になっていかんとあかんのや」というような意味の話を一生懸命されました。そのことばがやっぱり耳に残っていて、そして胸打ったので……みんなそうだったね。それで、前田先生を呼ぼうかと決めたんです。

それまでも、南但婦人会の同和地区の幹部を集めましてね、研修会というのか学習会というのがありました。和田山町の町長の並川さんという人が南但民主化協議会の役員だったのか、その人とか前田先生とかが出席されて、八鹿町の教育会館で研修会を持ったこともありました。それぞれの人が学習会へ出ていって「勉強していかんならん」と思ったのと違いますかな。私もそう思いましたしね。

――今言っているのは前田先生が和田山中学の話をされた前ですのか、後ですのか。

砂原　その前ですわ。前田先生が入ってこられたのは四十四年の、寒かったので、冬でした。この特措法ができたのは四十四年の六月か七月でしょう。その前に、そんなことを聞いたりとか、特措法ができてから、南民協から、確か市川町かどこかへ行きましたね。

婦人部員　やっぱりこんな学習があるなら、勉強しないと損やなあという気分になりましたわ。

砂原　それぞれの人がそうなったんやないかと思いますね。それで、婦人会の役員がそんな感じを受けて、会員に相談して、前田先生にお話をお願いしたんです。

――この部落に南民協の山本佐造さん、島田一哉さん、林田幸之助さんらが入って来られた時にどんな話をしておられたか憶えていませんか。

砂原　前田先生を婦人会がお呼びした時には、山本さんとか島田さんとかそういう人たちは関係なしに、ただ机の上でこうして学習したんですけどね。その前に南民協が同和地区へ向けて来られた時には、どういう意味で来られたのかなあ、「もっとちゃんとせえ」ということやったのかなあ。私はその時分はまだようものを言わん時期でしたので、なにかしらおかしなことを言ってくるなあという考えで聞いて座っていただけでね。

一番印象に残っているのは、山本佐造さんの話で「差別というのはどこまでもついてくる」という話でしたわ。

「満州（中国東北部）へ兵隊に行っていた時に、食べるものがなくて馬を殺して食べたと。そしたら、その馬肉を食べながら、その兵隊仲間で〝ヨッツ〟の話が出た」と言われましてね。それを何に結びつけて話をされたのか、満州まで差別がついてきたとはいわれましたけど、それではどうせえという話があったのか、私にちょっと記憶はありません。それから、林田幸之助さんは私の参加した場所にはおられませんでしたので、どういうことを言われたのか知りません。林田さんは中瀬鉱山の労働組合の委員長をされておられたとかで、最初から運動方面をやっとった人なんでしょうね。私は一番最初のころは、運動というものを知りませんでした。何の運動も……。労働運動って何をするんだろうぐらいにしか思っていませんでしたので、あの人は印象がありませんね。解放同盟というようになってからの林田さんの印象はあるんですけどね。

「胸はって生きなあかん」

——そうすると、さっきの前田先生の「同和教育はしっかりやっとかんとあかんのや」というのが一番印象に残ったということですね。

砂原　部落の中の者も、外の者もやっぱり正しく部落問題を学ばないと、これから差別のない社会を作っていくためには、学習なしでは、自覚なしではいけんという、そういう主旨でした。

中谷　何をするにしても、まず自分が部落の歴史、部落の実態をちゃんとふまえてかからんと、格好だけようせよではあかんと。まず部落の歴史、なぜ部落ができたのかということから、前田先生の話は始まったのやな。そして、聞けば聞くほど、浪花節や映画やないけど、その続きが見たい、その続きを聞きたい、話し合いをしたいというような気持ちが湧いてきましたな。

前田先生がこの部落の学習会に入ってきてもらった頃には、解放同盟もなくて、一般地区の地域婦人会と同じように婦人会としてやっていたのですけど、それから解放同盟の結成までの間に、部落問題について学習していきましたね。そして八鹿高校の差別事件が起きるまでに、非常にかっちりとした勉強をしてくれとりました。その後の活動にもすばらしいものがありましたけど、前田先生に入ってもらってからの三、四年の勉強で地についたものが得られたのではないかと思います。

——前田先生が入ってきてからの三、四年間の活動はどうでしたか。ずっと前田先生が学習会の講師をつとめられたわけですか。

砂原　前田先生は三月いっぱいまでででした。この年の一月、二月、三月の三ヵ月間だけで、神戸の県教委に転勤されました。そして、その後、かわりの先生が、古川明(音読み)先生だったか、そのあと飛び入りみたいな形で日高町の同和地区の出身で、町会議員に出ている和田与八郎という人が二回ぐらいかな、来てくれました。三月ごろから養父町の社会教育係の日下部さんが、ここの婦人会がこういう風な学習を進めていると聞いて、この部落へ上がってきましてね。教育委員会の動きで、和田与八郎さんとか、教育事務所の古川先生とかが来てくれました。古川先生が前田先生のあとに座って、学習の時の講師をいろいろとやってくれたんです。

――前田先生は三ヵ月間に何回ぐらい学習会にこられたんですか。

砂原　十三回ぐらいでした。一週間に一回ぐらい学習会を持ったように思います。婦人会の建屋地区の総会で、ちょっと同和問題をまじえて、ある疎開の子どもの話をしはって、あれで終わりやった。それで神戸へ移っていきました。

一番大事なことは、解放同盟の結成までは、同和会というたんです。同和会っていうのは、解放同盟の考え方も入っているし、それから正常化連というて、共産党系の考え方も入っているし、解放という焦点を持っていることには間違いないんだけど、兵庫県そのものがどっちからもええところを取り入れて、中立みたいな形でやったらええんやと考えていたのと違うかなあ。だから、前田先生が来なくなってから、八鹿高校と和田山商高の、いま思えば共産党系の先生らがどんどこ、どんどこ入ってきたわけですがあ。すでに、四十五年に入ってきていたんです。

――前田先生は部落の歴史のことをずうっと話されたわけですか。

砂原　ほとんどそうですね。そして、兵庫県の地図を持ってこられましてね。どこどこに部落があって、川はこういう具合に流れて、田んぼのたくさんあって開けてい
ってる播州のような地域には部落がたくさん存在している。そして、雪がたくさん降って農民が住みにくいような所には部落はこのようにないでしょうと、温泉町とか城崎町なんかには部落はほとんどないと教えてくれました。そういうことで、農業の活発にできないところに部落はないが、姫路へ向かって広がる播州平野のように農業が活発にできるようなところでは、部落がたくさんあると。この地図をみて考えられることは、農民の支配の道具として利用するために部落は作られたんだと、そん

な歴史的な説明をしてくれました。もっとほかにもありましたけれど、部落はなぜこしらえられたのか、作られたもんなんだということの詳しい起源説をきちっと押さえられて、それで終わりました。

婦人部員　そうでしたね。まだ、それから先の話をしてほしかったね。

砂原　ほしかったけど、先生だから、解放運動のことをさかんに言われたわけではないんです。

――部落の歴史をそういう具合に聞いて、自分たちの部落についての考え方や受けとめ方はどうでしたか。政治的につくられたものだという話を聞いて、どう思いましたか。

砂原　それぞれ受けとり方はありましょうね。

婦人部員　私らは、別に親から差別される村やとか、ちっとも耳にしたことなく育ってきたんです。なぜか知らん、小学校のころではそう感じたことはなかったんですけど、小学校を卒業してからクラス会があって出席したら、小学校の間仲よくしてきた友だちとかクラスのもんのふんい気が変わったような気が私はしたんです。私らは小さい時から差別というようなことは聞いたことも見たこともなかったんですけど、やっぱり親の苦労を見ておりますし、自分ながらに変やなという感じ方はあったんです。それと、私らの娘時代は戦時中でしたので、私らは農家でしたが、農閑期に報国隊として軍需工場にかりだされたんです。私は山東町の出身なんですけど、部落外の人たちといっしょに加古川市の工場に働きに行った時に、本当になさけないような、さびしいようなこともありました。私は同じように働きに行っとっても、友だちの中から部落のことで差別的なことを言われた時にも、私は何も勉強していないし、親からも何も聞いていなかったけど、別に（人間として）変わったこともないし、兵隊にも同じように出されとるのに、なんでそんなこと言わんならんのやと、私はそういうふうに思ってきました。そんでもう、そういうことは私らの小さい時から胸にあったもんですから、こういう学習を婦人会でしている時には、本当に自分の子にはそういう恥ずかしい思いをさせたくない、社会にでても力強い子どもにしたい一心で一生懸命に学習には取り組んできたわけです。

砂原　結局ね、なにか知らんけど差別されてきたということは、子どもなりに分かっていたわけでしょう。それをなぜされるのか、なぜというところが分からなかったのが、部落の起源説をしっかりと押さえたときにね、やっぱり政治によって作られたもんだ、大きな被害者だ、だから私らから立ち上がって、みんな胸はって生きるこ

とをせないかんやと、そういう学習を前田先生は三ヵ月間でしたけど、一生懸命やってくれました。「こう胸はって生きていかなあかん」という教育だったんですわ。だから、おんなじ人間やないかと、はっきりつかんだのが成果でしょう。それまでは、親は言うて聞かしてくれへんし、外へ出てみりゃおかしいし、なんでやろ、なんでやろと思うぐらいで、やっぱり格好よう生きるぐらいの術しか分からなんだです。もちろん、格好ようというよりも、人間らしくきちっとするべきことはし、守るべきは守ってせんならんのは当たり前のことですけど、それをやってるのになぜこんなにさせるんやろうと、おかしいなあと思ってました。

私はあの当時「私の素姓」という言葉を使ったと思うんです。「私の素姓は分かりました。だったら、胸はって生きなあかん。これは自分たちがまず立ち上がって胸はっといて、そして語れる、相手と語れる人間にならないかん。何がなんだか分からんと、クシュンとしとったらあかん。語れる人間になって、おんなじ人間じゃないかということを語っていく人間にならないかん」と言うとりました。そうやらないかんし、そうなってきたと。それ以上のものはあまりなかったけれどもね。なかなか今の社会はそんなにうまいことといってないけど、当時はそういう感じでしたねえ。

八鹿高教師が学習会へ参加してきた

——差別をなくす解放運動を起こしていかんとあかんという点については、当時まだはっきりしていなかったんですか。

砂原　運動というものはどんなもんか知らなんだ。

婦人部員　私らはまだ運動というものを全然知りませんし、私らが学習している中へ、八鹿高校の先生がこちらからお呼びしたんでもないけど、学習会ごとに、二、三人、五、六人とこられたんです。

――学習会の講師に呼んでいるわけではないけれども？

婦人部員　そうです。私らは初めの頃は、高校の先生は熱心やなあ、どこから聞いて来なさるんだろうと、まあ私らは不思議なぐらいに思ってましたんです。

――それは、いつごろからですか。

婦人部員　四十五年の五、六月ごろからでした。そしてやっぱり私らが学習しているおりに、八鹿高の先生は初めのうちは何も発言されるじゃなし、じっと黙って私らの学習内容を聞いたり見たりするだけで帰っておられました。それから一度学校の先生方と婦人会の会員と同和学習をした時に、ここの小学校の中江教頭先生が「なにか八鹿の高校の先生も発言して下さい」と言われましてね。その時に、まあ初めて八鹿高校の先生が話されました。それから口を開いて言われるようになりました。そして、先生らはどこで聞いてこられるんやろう、私らが一週間に一回、二週間に一ぺん寄るごとに、高校の先生がずっとこられたわけですわ。そして、高校の先生が話される差別問題についてのことと、私らが思っていることとは、ちょっと違うなあと感じたんです。学習会のすんだあとで、必ずみんなで反省会を持ったときに、みんな「八鹿の高校の先生が言いなはることは、どうも私らの思っとることと、ちょっと違うでえ」ということに気づいてね。そして、利用されんようにせんならんなあと気づいたんですね、みんな。

――学習会へ来て、八鹿高の先生が発言された中味はどんなものでしたか。具体的にどんな内容でしたか？

中谷　八鹿高校のやつらが入ってきたのは、自らの方に私らを引っぱろうとして入ってきたのやね、あとで分かったことやけども……。私もずっと学習会に参加しとったんですけど。「入ってくるのはいいと。私らはイデオロギーを持って入ってこられたら困るんだと。解放は大事なんやけど、片寄った考え方は困る。オブザーバーで入ってくるのはいいけど、発言はしてくれるな」ということを八鹿高校の先生に言い切ったんです。みんな変に思ってた。（先生らは）「もっと強硬にやらなあかん。運動せなあかん」というような言い方でした。

婦人部員　私らは特別措置法ができてからの学習ですし、そして自分らが育てていく子どもを本当に差別のない社会に送り出したい一心の運動ですしね。それで、高校の先生方がいろいろとお話なさるのは、ただ私らを自分らの中に引っぱって行くような話の内容でしたね。私らは「あくまでも同和教育であって、運動ではないんですからね」と、その当時言っとりました。その時はもう本当に熱心に来られたんですけどね。私が一番感じたのは、片

山(正敏)先生と私とが隣に並んでいっしょに学習していた時に、先生がこうしてプリントを広げて見よったので、ちょっと見たら、赤い印をしてこられているんですがな。「先生、それは何のあれですねん」と聞いたら「これは、みんな高校に来ている部落の子の印や」言うて赤でこうチェックされていました。私はこれにもちょっと変に思いました。そしてまあ、解放同盟にみんな参加して、みんな活発に運動をやりだしたら、それからすぐこちらへ足を向けてこなくなったですね。それまでは、もう八鹿高の生徒もここに合宿に連れてこられて、婦人会といっしょに学習したりしてね。私らの方から申し込んだわけではないんですけど、とても熱心でした。解放同盟に加入して、私らの方から立ち上がって、活発に活動していくようになってから、本当に顔を見せなくなったです。

――運動の話がでたということですが、どんな具合に運動していけばいいんやという意見を、片山先生らは出していましたか。

婦人部員　あまり実のない話でしたから、私らはほとんど印象に残っていませんね。

婦人部員　(八鹿高の)部落研の生徒の中に身障者が二人おられたんです。うちの娘も部落研に入っていたんです。それで、この集会所へフトンを持ってきて泊まらせたり、自分の家の風呂に入りにきてもらったり、話し合ったりしたんですけどね。私も娘が部落研におりましたので分からなかった点もあるんですけど、おかしいなあと感じた点もありました。部落研の子どもが私の家に来ていたとき、ちょうどたまたま部落問題のことがテレビで放送されていたんです。井口君と須崎君(ともに音読み)の二人が私といっしょにコタツに入って、テレビを見ていたんですわ。「なんであんなことせんならん。あんなことを放送せんでもええし、あんなことまで言わんでもえのに」と、その子らが話しますんですわ。私はテレビ見とって、そんなこと当たり前やし、部落問題があるんやから早いこと部落問題について認識せんといかんという放送でしたので、それは大事なことやなと聞いておったんです。「部落問題なんか、あんなことまでせんでも無くなるのに、なんであんなことせんならんのやろう。あんな放送までせんでいいのに」と言いますやろう。この子らはなに言うとるのか、言うとることがおかしいなあと、その時からおかしいなあと思ったんです。その時にちょうど林田幸之助さんの娘さんがいっしょに来ておられて、向こうで顧問の先生らと話しておられたんです。二人の子らの話を聞いておかしいなあと思いながら、ただ聞いていただけですましてしまったけど、今だったら、

「そんな考え方はどうやろう?」と言うんやろうけど、あん時はただおかしいなあと聞いただけでした。

「一揆を起こすぐらいせないかん」

婦人部員　私らは学習会する中で、いろいろと差別問題が起きて、そういうことを話し合っている時に、私らは自分らに対する差別の問題があっても、その当時は自分らで堪えて話し合うぐらいの程度でしたわ。そしたら、片山先生らは「生ぬるい、もっと立ち上がって一揆を起こすぐらいせないかんッ」とボロクソに言うて、歯ぎしりかむような口調で言われたんですわ。それほど力を入れていたんですけど、解放同盟に加入して、私らが本当に立ち上がって運動せんといかんいうようになってからは、一歩もこの村には足を入れられなかったです。学習する中でも、先生らの発言に対しては、本当に「すみませんが、分かりません」ということが多かったんですわ。

婦人部員　私は今思うんですけど、その時に先生らが、「そんな生ぬるいことではいかん」言われたことが、本当にその時は心から言うてくれたことなのか。それともみんなを自分たちの方へ引きずって運動を起こさせる計画でいたのか。それとも共産党という組織の中で、先生らは運動を大事にして一生懸命だったけど、やっぱり共産党の路線が違ってきたために、それについて行くために変心したのか。片山先生らは部落の人間じゃないし、党員でしたから、そういう路線についていかざるをえなかったのか、そこの辺が今でもちょっと分かりかねます。それとも、あくまで部落の人らといっしょにやって行こうと思っていたのか、党の路線が違ったためにああしたのか、いまだに分からんところがあります。

――部落の婦人会へ来て、八鹿高校の先生はどんな考え方を話していましたか。

婦人部員　私らは運動は大事やと思うし、最後には運動していかんことには部落の解放はないし、やっぱり問題が起こった時にはどんなことでもしていかないかんし、運動は大事だと思いますけどね。私らは解放同盟に加入して、一生懸命に運動をしだしていく中で、いろいろな事件も起こり、差別事象も分かりだしてきました。そうして運動していかないかんようになっていく過程で、先生ら自身は部落問題は大事やと思っていても、共産党の路線が違ってきたので、共産党をもり立てるために、共産党の路線に行ってしまわんことにはあかんということで、あんな具合になったんではないかなあと、私は個人の意見としてはそうではないかと思いますけど……。

中谷　その当時、南但では今でていた前田昭一先生と東

上高志(部落問題研究所)という人が一番の看板みたいにやってましたね。うちの部落も初めから東上高志を呼んだり、来たりしていたら、あるいは方向や考え方も変わっていたかもしれん。初めのとっかかりに、前田先生の部落の歴史から入ったのがよかって、あれに気がつき、これに気がつきして、最後には八鹿高校の先生でも追い出すような格好になりましたけれども……。さっきおかあさんが話していたように、部落研の子どもらがテレビを見て「こんなことまでせんでもええ」と言うのは、東上高志の、共産党系の考え方なんです。要するに「寝た子を起こすか、起こさんのか」という問題に発展したんですな。

――八鹿高校の先生は、どんな運動をしていけばよいと言ってましたか。

中谷　具体的にそんな運動について、こうせなあかんのや、あせなあかんのやという話はしなかったと思います。今おかあさんが言うたように、私も聞いとりますけど、こう膝をたたいて「いまいましいと。こんだけ婦人会は勉強しとるんやから、もっとやらなあかんのやと。一揆を起こすところまでやらなあかんのや」と、なんか急きたてるいうのか、けしかけるいうのか、そういう態度でしたな。これもあとで気がついたことだけど、あれはわれわれに挑発をかけて、何か問題を起こさせようとしたとしか思われませんね。

婦人部員　それはね、みゆきちゃんがバス会社に勤めなはっていてな。そして「ちょっと好きな人があるんだとか、しかし一般地区の人で、こういったことがあったんや」と、そのおかあさんが学習会で話しなはったんです。「それでもまあことを荒らだてずに、みんなでもっともっと勉強してねえ」と言うと、そのおかあさんも「うちは身内で話し合っておさめているんや」と言うしな。その時に「そんな生ぬるいことではいかん」言うて、ほんまに歯ぎしりかむような態度で、片山先生は言いなはっ

たでな。

砂原　それやったら、解放同盟の運動家みたいな感じもするしな。

婦人部員　だからさっき話したように、その時は、そうだったけども、そのころから共産党の路線が解放同盟と違ってきたために、片山先生は部落の人ではなし、共産党の党員だから、共産党の方が大事やろう。そういうことから、自分の本当の考えと離れていってしまったのと違うかな。あの先生自身が貧乏のドン底で、橋の下に住んだぐらいの生活してきてな。そやから、自分自身は部落やないけど、貧乏な生活は知っているわな。そういうことやけど、路線が違ってきたために、共産党の路線についていかんとひどい目に会うわなあ。それに自分の心が打ち勝つことができずに、ああなったと思うんやけれどね。

砂原　そういうこととは違うわ。

婦人部員　片山先生は労働者の中には差別はないけれども、資本主義社会の中に差別はあるという押え方をしていたことは、はっきりしています。そういう考え方があって、学習会で部落の歴史を勉強しとった私らでは運動にならんので、毎回毎回でてきても、いつまでも一歩も前へ進まんし、自分らの思うようにならんいらだたしさで「はがゆい」と言うては帰りよったんやね。それで八鹿高校なんかでも差別発言がでた時には、あんだけ学習会に出てみんなと勉強しとるんやから、すぐに差別事象に対しても、先生がことに当たってもらわんならんけども、そうはしないやろうがなあ。結局いいかげんに片付けてしもうて、学習会だけには来とったんやろう。私らといっしょに、本当に部落差別をなくすために学習しているのやったら、もっと真剣にやってもらわんならんと私は思ったんや。そやけど、そういう態度は全然見えへんし……。それから、私の息子が八鹿高校へ野球に行った時でも、守衛さんが指四本立てて、差別発言したってえ。その時でも、それでもいいかげんに聞き流してすましなはったしな。どうもあんだけ一生懸命に勉強してなさるのに、なんでもうちょっと取り組んでもらえんのかなあと思っとったんです。

差別への怒りを口を開いて言うこと

――部落の歴史から始まった学習会はその後どうなっていきましたか。

砂原　県教委の同和教育指導室という名前だったか、その指導室の方針として、同和教育指導員を県下に四十人ほど配置しとった。その一人として、南但でも校長あ

がりの金山照夫先生(音読み)がこの部落に入って私らの学習の指導にずっとこられていたんです。金山先生は市民運動の話を盛んにされましたわ。イタイイタイ病の人たちが自分の身体をおかされた。まともな身体やったのに、公害におかされて、偏見で見られて、その次に生まれてくる子もあの人の子やからいうて、まあイタイイタイ病の差別をされる。そういう人たちが今日は腹を立てて、腹を立てたらその次は立ち上がって行動に移して、そして口をそろえて開くという運動を起こしているんだという教育を受けましたわ。あれが学習会の最後で「市民的権利」という話の中で聞きましたわ。

そこで、解放同盟の南但地協が結成されたんです。だから、二、三人の人が「私は運動はきらいなんや。机の上の学習はして、個人プレーはするけど、団体でワァーワァー言うのはきらいなんや」という言われ方をしました。そして「糾弾ということばもきらい」「解放同盟ということばもきらい。第一、運動はようしません」ということで抜けられたわけです。あとのもんは、そういうことじゃない。私たちはこういう教育を受けてきたんやから、やっぱり部落差別されて腹を立てんもんはないんやで、腹を立てたら、その次は口を開く、行動に移す。これが運動じゃろうというとらえ方をしとったわけです。だからすっと解放同盟に加わって、結成できたんでしょう。

――金山先生は何回ぐらいこられたんですか。

砂原　二年間、毎月二回ずつ。四十七年、四十八年の二年間ずっとここへこられたんです。その間講義を受けたが、四十八年に支部が結成されたあとは、もう運動やから、指導員は入ってこなかったんです。

婦人部員　金山先生のお話を聞いて、この先生はちょっと左寄りやなあと思ったりしたこともあったでえ。

砂原　やっぱりな。腹が立ったら口に出せという教育やったわな。

――金山先生は二年間来て、部落の歴史とかはもうやらなかったのですね。

砂原　明治以降の富国強兵とか、日本の軍国主義については一生懸命教えてくれました。私も大正生まれですから、よう分かるわけですね。そういう時に日本のあり方はどうだったか、明治百年間の歴史はどうだったか、そして今日現在はどうかと、歴史の学習も現在に近づいてきとったわけです。今本当の民主主義を築くには部落解放が一番大事であってと、そういう歴史の学習はありましたけどね。金山先生にいろいろと私らが注文して、政治の仕組みとか婦人の現在のあり方・理想像といったも

のについて、あれこれの本を持ってきて読んで聞かせてくれたんです。こうあるべきや、ああやるべきやと。

八鹿高教師の学習会は私語ばかり

――ほかに、解放同盟の支部結成までのことで、記憶に残っていることは何かありませんか。

砂原　とびとびの話になるけど、八鹿高の先生に接していったときの感想をいいますと、四方(しかた)先生というのは片山先生の右腕か左腕かといわれた立場の人でしょう。あの人とは私はいろいろと付き合っとったけど、「資本主義社会の中に差別はある」とか、そんなことは言わなんだなあ。四方先生は人間関係を深めていって、なんかこう、私の言うことも向こうが聞いてくれるというような関係でしたね。ある程度こっちから言うたら、「そうか、そしたら聞いてあげるわ」といった感じでね。日本国中の部落問題を全体に見ているということではなくて、個人的な人間関係を作って、そしたら選挙の時には共産党に入れてくれるというようなことを考えていたみたいです。解放同盟ができたら、先生はみんなピタッと来んようになったやろう。

婦人部員　うちの部落研に入っていた娘が卒業するおりに、卒業式で片山先生に会って、「先生、いろいろお世話になりましてえ」と挨拶したんです。そしたら、普通の先生やったら、「どんな部落問題があってもがんばれよ」とか、なんとか言わんならんがなあ。そんなことを一言も言わんと、ただニタッと笑って、冷たい眼をしてえ。あんな冷たい眼って、なかったたわ。あんだけ学習会に出入りしていたのに、なんでああなったのやと思いましたわ。

砂原　私は八鹿高校で共産党系の指導者になっている、そういう何人かの教師は、私たちに錯覚を起こさせるようなそれぞれのやり方をしはったんやないかと思うな。あんたが言いなはったように、解放運動が二つに分かれたので、あっちの運動に行くよりしようがなかったんやろうと思うと言いなされるけど、そしたら部落研の中で何を教えていたかというと、やっぱり「朝田一派」という言葉を出しているやろう。私ら、四十五年ごろだったら、「朝田一派」ってなんのことか知らなんだよ。もうやさしい勉強ばかりしとるだけでね。

婦人部員　ことばのこともそうやけど、実際八鹿高校に先生との話し合いに私ら三人で行ったことがあるんです。その時、ちょうど体育祭の練習の最中で、外は練習でワァーワァー言うとるし、中では先生の話す言葉が聞きとりにくいぐらいでしたんや。まあ、ここにおいでの先生

は一生懸命にそういう話に取り組んでいなはったけど、ほかの先生といったら、こう切断したみたいに、あんたら話したければ話せ、わしらは自分らの話するわというたように、自分勝手な話を当たり前みたいに話していましたわ。一人の先生が何か意見を言うてほしいというもんやで、私はもうたまりかねて「こういう風な会合の中でも、先生には話し合いを一生懸命される方と、自分の話を一生懸命して、こっちの話をそっちのけにするようなふんい気だったら、こんなふんい気の中で、解放運動の同和学習する気にとってもなれへん」と言うたんです。そない言うて、自分でも言い過ぎやないかなあとその場で思ってヒャッとしましたけど、そう言って帰りました。

砂原　四方先生に「部落問題をよう口にしません」と言う先生がザラにあったわ。

婦人部員　そして、部屋を出たり入ったりして、保育所の子どもが出たり入ったりするような状態でしたので、先生がこんな状態で、子どもがここの学校に来てどんな状態で学習しとるんやろうかと思ってね。そないに言うたことばが今でも頭に残っていてね。帰りにも私はずっと言うたです、「向こうの先生にきつう当っとるんやねえやろうか」と言うて、顔が赤こうなってくるのを憶えました。

――四十八年ごろですか。

砂原　あれ、何年かな。四十七年か四十八年の九月でしたかな。いや、解放同盟のできていない時やから、四十七年の九月やな。

婦人部員　これやったら、八鹿高の先生の中でも同じ方向に行っていないんやなあと感じて帰りましたね。

砂原　うちら三人が行った時には、八鹿高校の先生の腹はマチマチやったわ。はっきり見えとったわ。同和教育なんかそんなにがんばってせんでもええとあっち向いとる先生やら、この忙しいのにこんなことに時間をとられてえという迷惑顔の先生やら。「同和問題を地区の子どものおる前でよう言いません」という先生が大勢あったわ。それで、私は「同和問題は国民的課題といわれているのに、教育の場できっちりと押さえて言えんようでは、教育者はどうするねん」と言うたわけです。あんたは、今でも傷あとになっとることばを言うたわけやな。そしたら、帰りの自動車の中で、「砂原さんらが怒りだしたので、どうしようかしらと思うた」と四方先生が言うとったやろう。

　四十七年ごろに行った時には、ほんのわずかの先生がそこへ来て座るだけでヤレコラサやったんや。四方先生はその時にこぼしはったことはこうだった。「片山先生

はなっとらんとものすごく怒るんやけど、ボツボツものになっていったらええんやで、まだこの程度でええんと違うかあ」と、そんな言い方しはったわな。四十九年十一月の(八鹿高校差別事件)の前に、グァッと結束させるところまで行くのには、そんなに長い期間でああなってへん。首脳部はなっていたかもしらんけど、全体の六十何人かの教職員を結束させるのにはね、もう恫喝とか強制とかで、どうかしたんやろうね。

中谷　同和教育については八鹿高校ではもうジッとしてれんと。うちらの方が先を越そうとしたもんな。そういう発言を八鹿高校の先生に向ってできたのも、四十五年から四十七年にかけての学習の中で得た成果や。向こうはもう追い越されようとしたんや。

婦人部員　結局あの時分は私らの方が同和問題に関しては追い越してるような感じやった。

砂原　あの学習会のプリントに、私は腹が立ったことをいっぱい書いとるんやわ。「こんなもんが先生と言えるかい」とか……。まあ、みみっちいもんだったわな。

婦人部員　それで、あれから二年経つか経たんうちに、ああなったやろう。先生の方は早ようかたまるもんやと思ったもん。

婦人部員　うちの娘が八鹿高におったころな、女の体操の先生が二人おったんや。その先生らは「あんなのに私らはどうしてもよう付いていかん。年も年やし、学校を辞める」と言うて、うちの娘が卒業する年に辞めはった。それはちょっと風の便りに聞いたわ。

差別発言事件を取り上げた

――そうして学習をつんで具体的に運動にうつったのはいつごろでしたか。どんな運動でしたか。

砂原　運動をやりだしたのは、山田久(差別文書事件)ですわ。山田久の差別文書事件が四十九年一月で、それが一番早かったわね。それに参加している時に、すでにここでも差別発言事件をかかえとったんやね。四十八年にここで差別発言があったんです。

――ちょっと聞いたんですけど、バス停での差別発言ですか。

砂原　それやら、町同協(同和教育推進協議会)ができて、一般地区ごとに入って話し合いをしたんでしょう、その時に、ある地区の区長さんの差別発言がありました。だから町同協に対しても不信感というもんがあってね。四十九年に青年と婦人が中心になって、その差別発言について、ここで確認会を持って、しまいに糾弾ということになりました。そのへんから活発に運動をして動くよう

になってましたね。そうして朝来町の橋本哲朗の闘争があって、その次に八鹿高校になったんですけど……。

少しあと戻りしますけど、婦人会で同和学習会をつんで、まずみんなが語ったように、自覚を持ちましたでしょう。最初にやったことはね、中学校で正しい同和教育をせよという要求を出したんです。婦人の方からね。中学校の校長はじめ教師はどうやったらよいのか分からんでしょう。(同和教育の)副読本は一応もらっているけど、教壇に立ってどうしたらいいのかが分からなかったのです。だから、したかったのか、したくなかったのかは別として、私たちの要求に応じて「やりましょう」と応じたわけです。部落の者に対して、「責任を持ってくれるか」ということばも出ましたしね。まず、この建屋(たきのや)の校区内の育友会の会員に意見を聞いたところ、意見が二つに分かれていましたけどね。「今さらせんでもいい」とか「するべきだ」とか……。「せんでもいい」という「寝た子を起こすな論」は少なかったですね。婦人会の組織の中でも、会長さんがかなりしっかりした人で、役員だけでもと私らの学習会にいっしょに参加してきたりしていたんです。

そして、あれこれ動いているのが全体に浸透してくると、小学校の校長も教師もジッとしておれんと。小学校で部落問題をすぐに出せるというわけではないけど、やはり教師としてみんなといっしょに学習の中に入れてもらいたいということで、一番最初に「建屋同和問題懇談会」という名前をつけた組織を作ったわけです。それには、小学校校長以下と、中学校校長以下の教師と私たちと婦人会の幹部の会長・副会長とで常に懇談会を持ちましょうと、同和教育を進めていくいしずえというもんを話し合いよったわけですわ。

その時点で、この部落の婦人会というのは、すばらしい婦人会で、もう評価されとったんです。この同和問題がどうのこうのと言われるまでもなく、建屋地区十ヵ所の中でも、ここの婦人会は家庭婦人バレーボールでも、意見発表会でも、レクリエーションでも、なにをやってもそれこそ優勝旗を持って帰れるようなパリッとした婦人会だったんです。

中谷　まだ婦人も四十歳前後で若かったし、生活環境でも、今言ったような婦人会活動にしても、もう建屋十行政区の中でもここの婦人会は自画自賛でおかしいけど認められとったんです。特に、お年寄りの婦人会の会長さんでしたけど、バスに乗って通るのにここの部落ほどフトンを干している、衛生面をきれいにしている所はない、ほんとに感心やとほめてもろうたことがあるんです。

砂原　とにかく評価されとる面がいろいろとあったんです。小学校の生徒はみんな勉強がようできたんですわ。勉強はできる、素行はいいね。小学校でも中学校でもこの部落から出ている子どもはほとんど委員長でした。子どもも今よりウンとおりましたしね。だから、部落差別を抜きにしたら、どの点から眺められても、ひょっと見た目には貧乏でも、この部落は一般のもんに負けてなかったんですわ。だから、それも含めて評価が高かったということでしたね。「そんなもん、私らは差別なんかしてないし、(どこそこの)部落の方がよっぽど私らよりシャンとしとるし、みんな賢いんやし、子どもさんもみんないい子ばっかりやし……」と、いい人やとかいい子やとか、どうやとか、ほめ言葉にかまけて差別しとらへんのやということやったんです。

それがここのバス停で降りた人から「うちら(どこそこの)部落と間違われたら困る」という差別発言が出てきたでしょう。だから、結局いい格好をしても、いいことばを使っても、よう勉強しても、何をしても、差別はあるやないかという押さえ方をしたんです。自分たちがそれまでほめられてきて有頂天になりつつあったところに、ガクンと来たわけです。

中谷　その建屋同和問題懇談会というのは、建屋地区の小・中学校、老人会、婦人会、育友会等々がもう黙って見ておれんということで、部落外から盛り上がってきて作ったもんで、私らから希望したんでも要求したんでもないんです。部落は有頂天というんですか、そうもなってへんけども、くさされるよりはほめられた方がうれしいわな。そういう中で、あの差別発言が出てきたわけです。だから、ガックリといいますのか、「これは、おのれ!」といいますのか、これほどまでにやっとるのにという怒りの気持ちと……それから腹が立ちますわな。それがいっしょになって、時もよかったのか、山田久の差別事象が出て、そこから今度はもう学習じゃなしに、運動へ入っていきました。出ました、出ました、どこへでも行きました。

――さっき出ていた区長の差別発言というのは、どんな内容だったのですか。

砂原　同和問題の学習会を持った地区の区長さんがね、その閉会の挨拶に立って「やっぱり、こういう同和教育は、部落のもんがどの側面から見ても、もっと同等のレベルになってから、はじめてこの地区として受け入れてやろう。こういうことははなはだ迷惑だ」と、まあ、自分らの足元をただしてから出て来いというようなことを言いはったんです。いっしょに出ていた婦人が「それが

差別や！」と、それこそ怒ってね。

――いつごろのことですか？

砂原　バス停の差別発言のあとのことでしたわ。

顕現学習で親も子も苦しみを越えた

――それから、さっき言っていた中学校へ同和教育をやってくれと要求して、「責任を部落で持ってくれ」とかなんとかいう話はどうなりましたか。

中谷　砂原さんが言うとった中学校へ同和教育を申し込んで、いわゆる顕現学習を申し込んだんです。その時は、うちもまだ生徒が多かったし、中には親子で泣きながら、「うちは部落や」と、もう大変やったあ。これはもう泣かんと分かりませんわ。これ以上、触れとうない。役場の倉庫の二階で話し合いを持ったときに、中学校の校長が「顕現学習に入らしてもらうけど、部落で責任を持ってもらえるか」と念を押された。

砂原　「教師が安心して教壇に立てるようにしてくれるか」と言うたわ。「安心して教壇に立って、同和問題を口に出せるような状態を部落で責任をもって作ってくれるなら、うちの学校はやります」ということを言いましたね。

中谷　だから、売りことばに買いことばで「責任を持ちます」と言うたわけです。それから、それじゃ部落だということを誰が子どもに教えるのか、学校側で教えるのかという問題があったわけです。まあ、何の苦もない連中は「そりゃあ、学校側でやってもらわんならん」ということを言うし、われわれの方にも責任がありますしね。これは、やっぱり親子の話し合いの中でやらなあかんやないかとなって、中学生徒を持っとる親は、個々に話そうとしたんやが、そりゃもう、話せませんわ。

砂原　それは大変でしたわ。

――顕現学習はいつごろからいつごろまでやっていましたか。

砂原　それはね、四十五年から同和問題の学習会に取り組んだでしょう。だから、うちでは八月の夏休みを利用して、それを言ったわけです。とっても親子で顕現学習するのはタイミングをよう見んとね。自殺せえへんかということ、それこそ神経質な子どもの場合、そんなことも考えたもんな。あるおかあさんの子どもなんか、長いことよう言わなんだな。

中谷　さっき中座しはったおかあさんなんかでも、子どもが「おかあちゃん、違うんやろうがあ、違うんやろうがあ」と言うて……。（と涙声になった）

砂原　「ここは部落やろうけど、うちは違うんやろうが

ね」と言ったんやね。ほんで「いやいや、そうじゃないんや」と、今言わんとあかんと思って言うたそうです。『闘いの炎』という文集に、あの人が書いてあると思いますけどね。「たとえば、あそこの部落（一般地区）とあっちの部落とは親戚があるやろう。そこの部落とここを飛び越えて向こうの部落とは親戚があるやろうと。ここだけが、建屋のどこにも親戚の関係がないやろう。だから、ここはそうなんやで」と言うたら、その子はもうよう寝なんだというですがな。自分がそんなんやということを知って……。その子は男の子やけど、それまでに、『破戒』（島崎藤村）を読んでいたんですってえ。部落の者のみじめさいうのか、差別のきびしさいうのか、（丑松が）逃げまわったというのを読んでいるから、それでものすごい、むごい差別っていうのを感じとるわけですわ。だから、それがよもや自分であったと親から聞かされた時には、晩よう眠らんと、朝まで親にしがみついて、モゴモゴしてすんだと言うんです。そんなもんでした。みんなそうでしょうね。上手に言い表わす人と、よう言い表わさん人とあるんで、のん気にやっているようでも、自分ところはこうでしたんやと口に出してなかなか言いしませんわ。

うちらでもものすごいことでした。うちの娘は部落差別があるんやということ自体を知りませんでしたわ、教えた時には……。で、こういうことなんだと詳しい話をして、ここもそうなんだよと。「おかあさんが生まれている所もそうやし、あっちもそうやし」と言うてね。「だから、今日まで学習会に参加してきたのは、こういうことを一生懸命勉強してなくすためにやってきたんや。それを学校でせんないかんし、差別をなくしていくんだから、しっかり自分の立場をおさえて、差別をなくしていかんとあかん」と教えましたけど、そりゃあ、しっかりよう押さえませんでした。親も子も腹では押さえているんやけど、口にこう言えませんやねえ。『縦の木は残っ

た』（ＮＨＫ）という連続テレビ番組が放送されていた時分でしたんや。あれに原田甲斐の家老の筋と庭番の娘さんのおたよさんという人の恋愛関係で、家老の人と庭番の人との結婚は絶対に許されんのやな。許されずに、二人が苦しんでいく場面がいくつも出てくるんですわ。それを私が分からそうと思ってね。結局、部落差別というのは、ああいう風に士農工商穢多非人と身分差別されて、ああいうことは今でもそうなんやってえ。だから、結婚という時には隠さないかんし、向こうを説得してちゃんと分かってもらおうと思ったら時間がかかるし、結婚問題についても、そのテレビのテーマを見て、結びつけて話すんですけど、聞こうとせんのですわ。もう、ウルサイんですわ。自分が部落出身やと聞かされたら、もうガックリきてしもうて、勉強する気もないし、何をやっても、もう自分はみんなからこういう風に思われる人間になっとるんだというとらえ方をしてしもうて、そりゃあ成績も二学期になったら落ちますしね。無茶苦茶でしたわ。うちは一人っ子でしたから、特にそうだったかもしれませんけど、大変でした。

中谷　顕現学習に入ってもらって、三年、二年、一年生としましたね。

砂原　うちらは中学一年生でした。

組織部員募集!!

組織部員を募集しています

生協新聞・書評誌の編集発行、講演会・映画の開催など、文化・教育活動を自らの手で作り上げてみませんか。

●連絡先　生協本館３Ｆ・組織部内
☎３８７－９９９８（直通）
☎３８８－１１２１（内線４８２１）

中谷　その当時、八鹿高校に六人か七人か入っていたんです。ここらで一つの地区から六人か七人か八鹿高校に入学してるところはなかったんです。そんだけ、子どもたちは優秀であったと。

砂原　ここで、一年のおり顕現学習をして、ある程度の同和教育を受けてね。その時分になると、親も段々と強ようなるしな。で、糾弾会とか確認会につれて歩いたんです。『樅の木は残った』を見て、いろいろと詳しい話をしていこうと思うけど聞いてくれんから、そういうところへ連れ歩いたんです。そういう中で、やっぱり差別発言をはっきりと聞くでしょうがあ。そやから自覚して行ったんかな。それに参加させることによって強ようなったというんか、そんな感じがしましたけど……。

中谷　いずれにしても基礎が大事やということは、うちの婦人部がここまでやれたのも、八鹿高校の事件が起きるまでの四、五年間の学習会をやっていたからや。八鹿高校であんな事件が起きた時に、負けずにご飯食べずにやるとやってくれたのは、その間みっちりとは言わんけど、ある程度の基礎をつけておったためで、だから学習、勉強することは大事なことやと今でも思います。私は子どもが大きくて、もう孫もおって、「あんたは子どもがおらんからええわい」と言われましたけど、顕現学習に

入る時に、そら、つらかったですわ。自分ところにおったらなあ、どないして話そうかと思いましたものな。顕現学習を受けて中学校を出ていった子どもたちが、八鹿高校にようけ入って、活動しだしたんです。

砂原　大勢の婦人が八鹿闘争に参加したでしょう。私の娘は、ハンストのメンバーだったし……。

けれども、一番最初に言ったように、間違ったことをしたとは絶対に思いませんね。間違ったことをしたとは思いません、ハイ。こういう風に学習してきて、やっぱり自覚して、世間に指さされんようにせなあかんと思ってきましたし、今でも思ってますしね。そうして、格好ばかりようするんやない、その内側にきっちりしたものを持っていて、そして、胸はって生きていかんとあかんという考えで、糾弾会にも参加しました。

書評編集委員募集!!

『書評』を自分の手で創ってみませんか?

☆雑誌の編集に興味のある方。
☆思想・文化運動をやってみたいと思う方。
お気軽に編集委員まで。
・連絡先　生協本館3F・組織部内
☎387-9998（直通）
☎388-1121（内線4821）

聞き書きメモ

① 兵庫県養父郡養父町の被差別部落に出かけて、地域婦人会・支部婦人部としての部落問題学習の活動を聞きとりした。中谷常吉さんは支部長であり、砂原エリ子さんはかつて南但地協の婦人部長として運動していた。また、聞きとり調査では、砂原さん以外に、砂原あや子、谷口こゆき、砂原まきの、中谷一江、田中とみ子さんの婦人部員も出席してくれたが、発言回数などの関係で、「婦人部員」と一括してまとめたことをお託びしておきたい。この聞き取り調査は一九八一年七月五日の午前中二時間ほどにわたって行なった。

①中谷さんからは自分の娘さんの結婚のおりに部落であることを明かすのが苦しかった話、②砂原さんからは自分の婚さんの結婚について不安と悩みがあるという話も聞いたが、割愛した。

② その後、この婦人部のほぼ同じメンバーに前回と同じ部落内の教育集会所に集まってもらって、同年十一月二十八日夜八時から三時間ほどにわたって二回目の聞きとりをしたが、ここでは全部割愛した。その時には、①支部結成後における差別糾弾の闘いのもよう、②南但馬における差別事件に対する八鹿高校教師の消極的な姿勢、③八鹿高校の「同和」教育の実態、④一九七四年十一月二十二日の八鹿高校差別教育糾弾闘争に立ち上がる直前の八鹿高校部落解放研究会の行動とそれに対する教師の敵対の姿勢、⑤話し合いを求めてハンストに入った解放研の子どもの母親として、八鹿高校の教師のやり方に感じた不信感と怒りなどについて具体的に聞きとりできて、私自身が八鹿高校差別教育糾弾闘争の正当性をあらためて実感した。

（たみや　たけし・社会学部教員）

—研究余滴—　ボードレール 13

ボードレールと死（その二）

—「旅」の意味するもの—

山村嘉己

ボードレールの死に対する意識が、初版『悪の華』（一八五七）と再版『悪の華』（一八六一）との間に大きな変化を示したのではないか、それを証しするものが再版の末尾におかれた「旅」という長詩だということを前回述べておいた。それを詳しく示すためにも「旅」の全体をひもといて見ねばならない。

「旅」がはじめて発表されたのは一八五九年四月一〇日、「フランス評論」誌上で、「あほう鳥」「シジナ」の二篇とともにであった。この頃、かれが発表した他の作品として「一八五九年のサロン」「近代生活の画家」などがあったことは注意しておく必要がある。また、かれの生涯の呪うべき伴侶ジャンヌ・デュヴァルが卒中に倒れ入院したのもこの年であり、かれ自身が軽い脳充血の発作を経験するのは翌六〇年であることもつけ加えておこう。

「旅」はフローベールの友人で、当時、批評家、小説化として有名であり、また旅行記などをよく書いていたマキシム・デュ・カン（一八二二—九四）に献じるという形で書かれている。デュ・カンとボードレールとの関係については阿部良雄が詳しくふれているので、それを拝借すれば、デュ・カンはその著『文学的回想』ではボードレールを世に送り出したと称しているが、実際は自ら主筆であった「パリ評論」にボードレールが原稿を送っ

たときも、十二篇のうち僅か一篇を他の一篇と加えて発表しただけで、そんなに好意的であったとは考えられない。ただ、ボードレールはデュ・カンに献じるということの印刷の許可を得る手紙（五九年二月二十三日付）の中で、「久しい以前から私は、あなたにふさわしく、またあなたの才能に対する私の共感の証しとして役立つような何ものかを作ることを企てていました」と書いているので、それを額面どおりとるのはともかくとして―クレペリブランの指摘するようにボードレールがデュ・カンに数百フランの借金をしていたという事実がからんでいる可能性もある―二人の間に思想的な交流をはかる気持があったことは否定できない。もっとも阿部氏が指摘するように、ボードレールは親友アスリノーには「私はデュ・カンに献じた長い詩を書きましたが、これは、自然を、わけても進歩の愛好家たちを震え上らせるていのものです」（二月二十日付）と書いているというから、むしろデュ・カン風の考え方に対する強い批判が心内にあったと考える方が適当であろう（この問題については、阿部訳『悪の華』の解説六一一―一二頁を参照のこと）。

それでは「旅」を訳しながらそこに展開されるボードレールの考えに照明をあててみよう。

I

地図や版画を好む少年にとっては
宇宙はその果てしない欲望と同じに広大だ。
ああ、ランプの灯りに照された世界の何と偉大なこと
思い出の眼からすれば世界は何と狭少なこと。

ある朝　われわれは船出する　胸髄を燃え上らせて
心には怨根と苦々しい欲望がいっぱいだ。
そしてわれわれは行く　波のリズムのままに
有限の海に無限の心をゆだねながら。

ある者は　忌わしい祖国を逃れて嬉しいと言い
ある者は揺籃の地の恐しさを言い、またある者は
女性の眼に溺れこんだ占星術師さながら
あやしい香りを漂わす暴虐のキルケを逃れようと。

獣に変えられてはならじと　かれらは酔い痴れる
空間と光明と燃え上る大空に。
氷河はかれらを凍らせ　太陽はかれらを焼きつくし
接吻のあとは徐々に消えて行く。

だが　真の旅行者とは　ただ旅立つために

旅立つものだ。心も軽く気球に似て、
宿命の畔を断つことはけっしてできず
それでもいつもわけ知らず　「いざ行かん」と叫ぶ人

この人たちの欲望は流れる雲の形をしている
新兵が大砲の夢を見るように　かれらは夢見る
はてしない快楽を　定めなく名づけがたい
人間の心ではその名さえけっして知らぬ快楽を。

精神の世界の果てしなさに較べれば、宇宙の広大さなどは取るに足らぬと、人間の心にひそむ無限への想いを力強く提示しながら、それ故につねに自らのいる場所を離れて未知の世界を希求せずにはおれぬ人間の運命を《真の旅人》とボードレールは規定する。すでに『悪の華』全体が倦怠の海に漂う人間の精細な報告書であるとともにそこからの脱出を願う祈りの連続であったことはいうまでもないが、その末尾を飾る「旅」にふさわしい堂々とした口調と広い展望がこのⅠの中には十分に感じとれる。なお、キルケとはホーマーの『オデュッセイア』に出てくる妖女で、人を豚の姿に変える魔力を持つが、このイメージにジャンヌを見出し、ボードレールの現実生活における苦々しさを感じることは容易であろう。

Ⅱ

ああ恐しい。われわれは舞い　おどる独楽(こま)や球に
そっくりそのまま。夢の中まで
追い立てられ　転がされる、太陽を鞭打つ
残酷な「天使」さながらの「好奇心」に。

何とふしぎな運命だ。目標はつぎつぎ移動する。
何処にもないのだから　何処だっていいわけだ。
「人間」は飽きることなく希望を燃やし、
休息を求めては狂人のようにいつも走り廻る。

われわれの魂はイカリヤを求めて進む三本マスト
船橋で声が響く《眼をよく開け》と。
マストの声は熱っぽく狂ったように
《愛だ！栄光だ！幸福だ》と呼ぶが、「地獄」だ！それ
は暗礁なのだ！

見張番は島を見つけたと指さすが
それはみな「宿命」に約束づけられた黄金郷か。
「想像力」は歓喜の宴に酔い痴れるが
暁の光を受ければ眼に写るはただ暗礁のみ。

ああ幻想の国ばかりを追う哀れな男よ、
かれに鎖をかけ、海に投げ込むべきか
酔いどれの水夫、アメリカを夢想する男を。
かれの作り出す夢が　深淵をいっそう苦いものとする
のだから。

同様に年老いた放浪者は　泥沼に足をとられつつ
空を仰いで　輝く天国を夢見る。
眼もくらんだかれは　照明のあるところ
どんな茅屋にも　理想のカプアを見出すのだ。

このⅡ章では、擬人法とやや古風な比喩をあえて多用しながら、ボードレールは人間にとっての宿命的な能力、つまり、人間を人間たらしめている重要な、しかし、それゆえにまた人間を不幸に陥れざるをえない二つの能力「好奇心」と「想像力」とを紹介している。ここでは人間を動かす「旅」への想いも、実は居ながらにして試みる精神の運動に過ぎないことが示されているともいえよう。

Ⅲ

驚くべき旅行者たちよ　何という気高い物語りが
海のように深い君たちの眼に読みとれることか
君たちの豊かな記憶のフィルムをわれわれに示し給え
星と大気の織りなすあの目も綾な宝石の数々を。

われわれは帆も捨て、蒸気も捨てて旅をしたい
囚われの倦怠の心を晴らすためには
われらの精神をカンバスのように張りつめ
君たちの記憶を水平線の額縁づきで展開させることだ。

さあ　語り給え　君たちは何を見たのか

Ⅳ

「僕たちは見たのだ
星と波を、そして砂も見たのだった
だが　多くの衝撃と思いもかけぬ災害はあっても
僕たちはしばしば倦怠を感じた　この世界と同じく
すみれ色の海に輝きわたる太陽の光
入り陽にかすむ街々の光　それらは
僕たちの心に　熱っぽい不安を捲き起した
心ひく照り返しの大空に飛び込んでしまいたいと。

どんなに豊かな街々も　どんなに偉大な風光も
戯れに雲の織りなす模様ほど
神秘にみちた魅力はなかった。
欲望がいつも　僕たちの心をそぞろにした。

――快楽があればこそ　欲望はさらに強まる
快楽に養われる老木たる欲望よ！
お前の樹皮が分厚く　硬くなるにつれて
お前の枝は太陽をさらに近くに見ようとするのだ。
糸杉よりもさらに生命溢れる大木よ、お前はつねに
成長するのか――それにしても僕たちは注意深く
集めてきた　君たちの貪欲なアルバムのための素描を
遠方より来るすべての物を美わしと見る兄弟たちよ！

僕たちは敬意を表してきた　象の鼻を持つ偶像たちに
光り輝く宝石をちりばめた玉座にも、
そしてまた　あまりの素晴しさに君たちの銀行家が
財産を捨てても悔いぬ　細工をこらした宮殿にも、
まだある、眼もくらませるような衣裳にも
それから　歯と爪とを色にそめた女たち

そして　蛇と戯れる賢しい手品使いたちにも」

V

それから、それから何を

Ⅵ

「ああ子供じみた頭脳の持主よ
一番大切なことを忘れぬために言っておくが、
僕たちは至るところに　求めもせずに見たのだった。
宿命の梯子のてっぺんから脚もとまでつづく
つきせぬ原罪のうんざりする光景を。

女は卑しい奴隷、しかも思い上った愚か者
照れ笑いもなく自分を崇め　嫌悪もせずに自分を愛し
男は食いしん坊で好色で、情無しで欲張りの暴君
奴隷のそのまた奴隷、下水の中の溝だろう。

獄吏はほくそ笑み　殉教者はすすり泣く。
血の味　血の香りにみちた祭典
君主は権力の毒にのぼせ上り
民衆は馬鹿になろうと鞭を求める。

僕たちの宗教にそっくりの宗教がいくつもあり
みんな空に梯子をかけ、法皇閣下も
羽根ぶとんの中に悶える優しい男のように
お粗末な寝具にあって快楽を求める

「人間」はおしゃべりで　自分の才に溺れているが
昔と少しも変らずに　今でもやっぱり愚か者、
猛り狂っては神にほえかかる
「ああ　わが似姿、わが主よ、われ汝を呪ってやまず」

中でも一番ましな奴は　大胆にも「狂気」を好む者、
「宿命」に囲い込まれた羊の大群を逃れ
果てしない阿片の中に身を隠す！
――これこそ地球全体の永久に変らぬ報告書だ」。

まさにつきることのない人間生活への痛罵の記録だ、使われているイメージのどぎつさ、浪漫派の残滓を示す言葉づかい。些か露悪趣味の極彩色の地獄絵図をのぞく気がするが、これもボードレールの生きた現実の人生の反映にほかなるまい。それでもかれはここに問答の形式を取り入れることによっていたずらな感情の流出に歯止めをかけている。最初の原稿の段階では、このⅤとⅥと

いう区分がなかったという事実は、そこに加えられたかれの配慮を十分に物語るものと言えよう。かくて「旅」はいよいよ最後の段階にさしかかる。人生の総決算を試みた詩人はそこからどんな結論を導き出そうとするのだろうか。

Ⅶ

ああ　旅から引出す知識の何と苦いことよ
世界は単調で、卑少で　今日も
昨日も　明日も　いつも　われわれの姿を見せつける
倦怠の砂漠の中の恐怖のオアシスだ！

発つべきか　留まるべきか。留まりうるなら留まれ
発つべきなら発て。ある者は走り　ある者はしゃがむ
目ざとくも凶々しい仇敵を欺くために。
それは「時間」だ！　ああ　休みなく駆廻る人々がいる。

さまよえるユダヤ人のように、使徒たちのように。
この忌わしい格闘士から逃れるためには　何物も
船でも　馬車でも役には立たぬ。一方　ある人々は
生まれ故郷を去りもせず　この敵を殺すことができるのだ。

ついにはこの敵がわれわれの背骨を踏みつけるとき、
われわれはそれでも希望を抱き叫ぶだろう　「前進！」
かつてわれわれが中国へ旅立ったその時のように
沖合望み　風に髪の毛をなびかせながら。

われわれは「闇黒」の海の上を進むだろう
若い旅行者の歓喜の心をもって。
君たちには聞えるか　あの慕わしくも忌わしい歌声が
「来れかし、汝ら　かぐわしきロートスを

食せんと望めば。ここにして汝らの心の渇え望む
かの神秘の果実は栽培されるがゆえに。
来れ　来りて酔い給え　この終りなき午後の
得もいわれぬ恍惚の味わいに」

この聞きなれた口調の中に　われわれは亡霊を知る、
われわれのピュラデスが彼方から腕をさし出す、
「君のエレクトラへと泳ぎ出せ　君の心の渇きを消すのだ」
かつてわれわれがその膝に接吻した女性は語る。

まさに耳慣れたボードレールの主題がここでもまた繰返される。「時間」こそがわれわれの命を貪り喰う仇敵なのだ。それを殺すための諸々の工夫が呼び出される。しかし、所詮すべての方策は無駄なのだろうか。われわれは暗黒の渕に飲み込まれるしかないのだろうか。

いや、そうではない。「死」がわれわれを別の世界へと導いて行く。それはわれわれをいわゆる《人間の条件》から引離し、《未知》の世界の探求者として蘇生させる。Ⅷ章は「死」への高らかな呼びかけとなって終る。

Ⅷ

ああ「死」よ、年老いた船長よ　今こそ時だ　錨をあげよう！
もうこの国にはあきあきした、ああ「死」よ　出発だ
もし　空と海とがインクのように闇黒でも
君の知るわれらの心は光明にみちている。

君の毒をわれわれに注げ、それは大きな力となる。
その火がわれらの脳髄を焼きつくすから
「天国」も「地獄」も　何かまうものか　深渕の奥底に
新しさを求めて「未知」の底へと跳びこんで行こう。

《脳髄の花を咲かせる》という芸術家の夢で終りを告げた初版にくらべて、ここにはもっと激しい《新しい生》への希求が感じられる。この《新しさ》への手がかりが周囲に展開する《パリの情景》の中にちりばめられているのではないか。「太陽」となってこの都会へ降り立った詩人は街角に偶然の韻を見つけ、舗道の石に言葉を掘り出そうとする。「この都会の中に生きる人々の無数の錯綜した関係に触れる」（『パリの憂愁』序）ためには、新しい表現を創出せねばならない。「律動もなく脚韻もなくて十分に音楽的な、魂の抒情的な運動にも、空想の波動に

も、意識の飛躍にも適するような、かなり柔軟でしかも引っかかりのある詩的散文」(同上)が求められる。散文詩集『パリの憂愁』がボードレールの大きな夢となったのである。不幸にして、健康の衰退はこの夢の実現を妨げ、われわれは人手を借りて出来上った結果しか持つことはできなかった。しかし、この新しい表現への努力はそのまま新しい詩人の生き方を呼ぶものとして、ヴェルレーヌ、ランボー、マラルメから、さらにはシュール・レアリスト、ブルトンらに引きつがれて行く。再版『悪の華』の掉尾を飾る「旅」はかくて現代詩への新しい旅立ちを宣言した形で幕を閉じるのである。初版が呪われた詩人の生い立ちから死へという閉じられた円環の中で静かに、しかし永却に充足した形式をとるのに対し、再版は未来に永遠に開かれた可能性を暗示して終るといえないであろうか。

(やまむら　よしみ・文学部仏文科教員)

―連　載―

日本中国
ことばの来往（ゆきき）その20

芝田　稔

お客さまは　かみさまです

香港の九竜駅から汽車で約一時間、広東省へ入った最初のマチ深圳（センチェン）市に、中国の「経済特区＝経済特別区」が設置されたのは一九七九年後半のことである。以来もう五年余の歳月が流れている。

ここは中国の外資導入のモデルケースとして試行されているところだけあって、社会主義社会の中国では、資本主義の影響をもろにかぶる地区である。そのためかも知れないが、この特別区域は、金網によって中国社会と隔離されており、香港に向って大きく門戸が開かれている。香港からは日本やアメリカなど資本主義諸国から合弁企業に必要な機械が、また深圳からは香港をはじめ海外向け中国の農産品や加工品が、大型トラックで頻繁に運搬されている。のみならず、最近では「跳交誼舞＝社交ダンス」から「廸斯科舞＝ディスクダンス」へとエスカレートしているそうだが、当局は別に「禁止」している様子も見られない。だから、というわけでもないが、北京あたりでは「深圳特別区は資本主義の気風に染ってきた」との批判の声も上っている、と伝えられているが、その実情はどうなのか。手元の資料からその一斑を紹介

することにしよう。

それは商店のサービスについてである。具体的にいえば、北京での一般商店に勤める若い女子従業員と、同じく深圳での女子従業員の「服務態度＝サービス振り」から、この話は始まるのである。

北京に住み、北京のメガネ店の若い女子従業員の客扱いに業を煮やしている老境の知識人にとって、深圳は別世界に映るようだ。それがもしも、いわれるように資本主義的気風だとして排斥されるのであれば、それはとんでもない考え違いである、というのがその人の主張なのである。

北京でメガネを新調するたびに、嫌な思いをさせられたこの人によれば、店に入るまでに約二時間も街路に列を組んで待たされる。それは王府井や西単、前門大街でも同じことだそうである。

さて一週間後に新調したメガネを受取って掛けてみると、頭がくらくらする。

お客：このメガネ、合いませんが……

店員：検査したのは誰ですか。

お客：この店の検眼室で……

店員：いや、誰が検眼したのかと聞いてるんです。

お客：名前まで存じません。

店員：それでは話になりません。検査が正しくても研磨技術が悪かったのかも……だけど大勢いるから、誰の責任か、とても……

お客：なんとかして下さい。頭がくらつくのです。

店員：じゃ、もう一つ作りなさい。お金を払って。

お客：では、このメガネの代金を返えして下さい。

店員：一週間前に国庫に入りました。分りますか。役に立たないメガネなら、子供のおもちゃにでもしたら……

こんなやりとりでは、いくら交渉してもラチが明かないのである。そこでまた別のメガネ店へ行って新調となる。前の店のものよりは少しましであるが、まだ少しくらつくのである。

お客：このメガネ、少し……

店員：分っています。新しいメガネは、みなそうなんです。二ヵ月も掛けておれば慣れますよ。

冗談じゃない。こちらの話を聞きもしないで、勝手なことをいう若い女子店員である。

お客：そんないい方はないでしょう。

店員：あなたはメガネを掛けるのが始めてですか。メガネは新しい靴と同じです。慣れることですよ。

このことばには、もう返えすことばはない。「足を削って履に適わせろ」ということではないか。憤慨したその客が広州へ出張したついでに、友人に案内されて深圳特別区を訪れた。そして右のような事情から、ここのメガネ店で新調することにしたのである。

お客：メガネを新調したいのですが……

店員：いらっしゃいませ。ありがとうございます。

お客：ここで、できますか。

店員：ありがとうございます。では、この李さんが検眼させていただきます。どうぞ……

女性検眼員の李さんに案内されて検眼室に入ると、李さんは、まず「請坐、チンヅォ＝お坐り下さい」と丁寧な物腰で、新しい検眼器機を操作しながら、度数を合わせ、視力検査をする。終始ほほえみをたたえ、客である〝私〟が満足しているのに、尚〝私〟の意見を聞いて、ガラスを何回も変えては念を入れる。北京でなら三分間ぐらいで終る検眼が、凡そ半時間もかけたのである。

李さん：これであなたにピッタリのデータがそろいました。ご協力ありがとうございました。

お客：面倒をかけました。

李さん：いいえ、お客さまにサービスするのが、私たちの仕事です。

お客：いや、お礼をいうのはボクの方ですよ。

李さん：お客さまこそ、私たちの「衣食父母、イーシー・フームー＝生活の母」です。

さてガラスはアメリカ製、つるは香港製で、材料費と加工費合せて百三十六元（一元は約九十円であるから一万二千二百五十円）。少々高くとも、北京でのように、金銭を使って腹を立てるより、気に入ったメガネが手に入れば、これに越したことはない、という気持であったという。

その現品が北京の自宅へ郵送されて来たのは、注文してから十日目であった。

早速メガネを掛けてみると、近視・乱視はもとより、遠近両用の上にサングラスの機能ももっている。つるの掛け具合も上々。一つのメガネでなんと三つの代役がつとまるというわけだ。気に入らないはずがない。しかも李さんの書いた一通の手紙まで同封してあったのだ。

尊敬する〇〇先生：品物の届け先を見て、北京の人から注文を受けたことを知り、私がお役に立ったことを嬉しく思います。今後もしメガネを壊されることがありましたら、カードの番号をお知らせ下されば、十日のうちに、これと同じメガネを新調してお届けいたします。どうぞよろしく。

北京のメガネ店でこりごりしていただけに、胸がすく思いだったという。そして最後にこの筆者は、次のように文章を結んでいる。

最近また広東省へ来ているが、北京の業界では、若い女子従業員やその指導者たちの間に、深圳特別区の進んだ経験やサービス態度を学ぼう、という空気が出てきたようだし、加えて「顧客是皇上、クーコー・シー・ホワンシャン＝お客さまはかみさまです」というスローガンまで掲げている、ということを聞いて、喜んでいる次第である。

消えてゆくことば—「人民公社」(1)

「人民公社、レンミン・クンショー」は、いまや解体されてしまい、名称も行政機関の「区公所、チュ・クンスオ」と改称されている。したがって人民公社を組織していた「生産大隊」は「郷公所、シヤン・クンスオ」にまた最下部組織であった「生産隊」は元の「村、ツン」に変り「社員、ショーユワン」もまた元の「農民、ノンミン」或は「郷民、シヤンミン」に、その呼称が変ったのである。

人民公社が中国に出現したのは、一九五七年の冬から翌五八年の春にかけてであり、全国的な規模で組織されたのはその年の秋であった。解放後わずか十年足らずのうちに、土地改革から始まり、農業生産を互いに助け合う「互助組」を組織し、ついで「初級合作社」さらに「富級合作社」へと進め、個人私有制から集団所有制に、農業の個人経営から集団経営に切替え、そして政権機構が経済機構を統一的に支配する人民公社を誕生させたのであった。

このように、あれよあれよと、見る見るうちに社会主義社会の最良の形式という、人民公社にまで上りつめた時には、世界をアッと驚かせたものだった。しかもその後、文化大革命という未曽有の極左的政治・社会運動に捲込まれてしまう。そして七七年八月に至り文化大革命の終結宣言が出てからは、人民公社解体への動きも活発となり、八二年の憲法改正草案によって、いよいよ決定的となった。いまにして想えば、人民公社が存在した四半世紀は、中国にとって社会主義社会を建設するために庶二無二突き進んだ時期であり、半封建・半植民地の中国を解放したそのエネルギーを〝不断革命〟に投じた政治的・社会的一大実験の時期であったともいえる。

「人民公社」という名称は、曽てよく引合いに出された「パリ・コンミューン」のように、いまは歴史的な機関名称の一つとしてその名を留めることになったのである。と同時に、人民公社の誕生からその解体、消滅に至る過程で新しく創造された関連語彙も、それと同じ運命をたどることになるであろう。

ことばというものは、社会に起る事物・事象をいい表わすことによって、人びとの交際を円滑にすすめていく役割を果している。ことばこそ社会に起る一切の変化に対して、最も敏感に即応する。社会の変化・発展にともなって、新しいことばが創造され、したがって語彙がより豊富になり、より精密に表現できるようになっていく

のであるが、一方社会の変化によって新しく生れることばとは反対に、社会が必要としなくなったことばは、どんどん淘汰されていく。

「人民公社」ということばは、もはや実体を伴なわないことばとなってしまった。中国農村での最良の社会機構の一つとして誕生した人民公社が四半世紀を経た今日、音もなく崩れ去って行く感じである。想像もできないほどの巨大な政治機構が、目の前を通り過ぎて行く感じがする。いま私にとって人民公社とは、まことに偉大な、荒々しい、熱気に満ちた、直向きで、誠実な、そして後に引けない、孤立的な一大社会実験であったように映じてくるのである。

ともあれ「人民公社」という中国語彙の一つが現実社会から消え去って行くのであるが、四半世紀の間に人民公社と共に活きつづけ、時には流行語ともなった多くの関連語彙も、次第にその姿を消すことになるだろう。そこで、次回からこの紙面を借りて、印象深いことばを選んで紹介しておきたいと思うのである。

（しばた　みのる・文学部中国文学科教員）

お知らせ

投稿募集

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表・論文・エッセイも結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

投稿規定は以下の通りです

▼原稿は原則として縦書きで、一行二五字、二二行（五〇〇字）を一枚と計算します。ただし短評は、一行二〇字、二〇行（四〇〇字）を一枚と計算し、五枚以内にまとめて下さい。

▼枚数は自由（ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります）。

▼締め切りは各月末日。

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとっておいて下さい。

▼送り先　〒565　吹田市千里山東3－10－1
関西大学生活協同組合「書評」編集委員会
☎（06）388－1121（内線4821）
（06）387－9998（直通）

＊お詫びと訂正＊

「書評」第73号（一九八五年四月号）におきまして左記の通り誤りがありました。訂正し、お詫び致します。

目次　西　重和 → 西　重信

編集後記

キャンパスのアカシアも散り、曇り空のあいまに照りつける日差しもまぶしい。

4月開館になった総合図書館もすっかり学園風景のなかにとけこみ、昼休みのひととき図書館玄関前は、待ち合わせ顔の学生や談笑するグループでいっぱいになる。

先日はついにパフォーマンスする学生グループまであらわれた。

図書館利用そのものも結構増えているらしい。I・Dカードによる入館チェックシステム、端末機を操作するだけで終了する図書の貸出。従来の図書に比べれば非常にサービスがゆきとどいており、申し分がないように思える。しかしこの図書館で働く労働者はどうなのだろう。

関大よりも一足早く図書館にコンピューター導入を行なったのは阪大で、パート労働者の増加、首切り合理化、職業病の増加など、矛盾のしわよせが全て労働者に集中されている。

関大の図書館で働く人々はどうなのだろう。私たちの日常の目にみえないところに矛盾が蓄積されているのだとしたら、とんでもないことになるだろう。本を貸りる、読む、返却する、検索する、そんな一連の作業を通して労働者とふれ合うことがなければ、図書館は私たちのものになっているとはいえないだろう。

1985年9月号　通巻75号

編集・発行　関西大学生活協同組合・組織部「書評」編集委員会
連 絡 先　吹田市千里山東3-10-1（☎388-1121〈内線4821〉or 387-9998）
頒　　価　250円